時評

紫式部の恋の歌

小林賢太

前号に続き、『紫式部集』を取り上げたい。紫式部と夫・藤原宣孝との結婚前のやりとりを読んでみよう。

年かへりて、「唐人見に行かむ」と言ひける人の「春は疾く来るものと、いかで知らせたてまつらむ」と言ひたるに、

春なれどしらねの深雪いや積もりとくべきほどのいつとなきかな　（二八）

このとき紫式部は国司となった父・為時と共に越前にいた。年が改まったころ、以前から「唐人を見にそちらに行きましょう」と言っていた人（おそらく宣孝）から手紙が来た。当時、越前には中国の商船が停泊していた。「唐人見に行かむ」の発言からは、宣孝の好奇心旺盛な性格も読み取れるが、それを口実に紫式部に会いに行こうとしたのではないだろうか。このころ既に宣孝は紫式部に接近（求婚？）していたらしい。手紙の文面「春は早く来るものとお知らせしたい」には、「あなたの心も打ち解けて、私達の関係にも春が来るでしょう」との期待が込められている。

だが紫式部が返した歌は、「春になってもそれを知らぬように、白嶺（白山）の深い雪はさらに積もり、雪解けがいつになるか見当もつきません。私の心も同じです」とそっけない。ただし当時の贈答歌では、男性から求愛されても女性は素直に返歌しないのが一般的であったから、この歌が特別冷淡というわけではない。とはいえ、宣孝との結婚に迷いがあったのも事実だろう。紫式部より二十歳ほど年上の宣孝には既に数人の妻がおり、紫式部と同年代の息子もいた。妻の中には公卿の娘もおり、おそらくその人が嫡妻（正妻）だっただろう。第二夫人以下にしかなれないこの結婚に、冷静な紫式部が諸手を挙げて喜んだとは思えない。

しかし宣孝はユーモアのある、魅力的な男性だった。彼の茶目っ気のある一面が見出せるのが、次のやりとりである。

文の上に、朱といふ物をつぶつぶとそそぎかけて、「涙の色」など書きたる人の返りごとに、

紅の涙ぞいとど疎まるる移る心の色に見ゆれば

もとより人の娘を得たる人なりけり。　（三一）

宣孝は朱のインクを手紙にぽたぽた垂らし、漢語の紅涙（悲嘆のあまり流す血の涙）を演出する。「あなたが冷たい態度をなさるから、僕は血の涙を流しています」と口説く宣孝に対し、ここでも紫式部はそっけなく、「紅（朱色）の涙は疎ましいものです。だって朱は褪せやすい色でしょ？　同様に、あなたの気持ちもすぐに色褪せてしまうように見えます」と返す。朱は日光や熱に弱く、変色しやすい顔料だった。さらに歌の後に、「前々からよその女性と結婚してるくせにね」と皮肉っぽい一文を付け足している。だがこれは、宣孝を慕うがゆえのヤキモチとも読める。

その後、紫式部は宣孝との間に娘を儲けるが、結婚して三年もしないうちに彼はこの世を去った。その虚しさ、寂しさを埋めるように書き始めたのが、『源氏物語』だと言われている。